

# 保育醫學の諸問題

保育醫學研究会

砂田惠一  
深田英朗  
相田場均

## 一、立体的な保育醫學

私たちは、保育醫學それ自身、立体的なものでなければならぬと信じている。

まず分野から考えても、単なる小児科学でないことは、言を待たない。つまり、小児の病気を治すと言う消極的なものでなくて、保育と言う場を通じて実践される醫學である以上、衛生的な又体育学的なものもその中にふくまれている。

又、幼児の精神について考える時、これの精神医学的な、臨床心理学的な、精神衛生の管理を忘れてはならない

そこで、私たちの保育醫學研究会では、小児科医、小児齒科医、精神神経科医などの醫學者や、臨床心理學者、その他幼児を主たる研究対象としている心理學者などと協力し、實際保育に當つている保母、母親、その他の子供の指導者などとの力動的な連絡によつて、保育醫學の正しい出発を試みようとして行っているのである。

## 二、精神と身体との關係

まず、私たちは心と体の關係から立体的に考えて行こうとしてい

る。つまり、最近、盛に、精神身体醫學のことが言われているが、心を無視して体のことだけを考えるわけにはいかない。私たちは全ての病気が心理的な機能的なものから起ると言つた變調病理學的な立場をとるのではないけれども、機能的失調と、器質的病變の間に、相互媒介的な力動的な關係があるのではないだろうか、と云うことを、色々な臨床經驗から感ずるのである。

特に、一般医や精神神経科医と、精神の心理的機能を調べることを専門としている臨床心理學者との協同による診断及び治療は、ごくありふれた病氣の中にも神経症的な色彩を見出して、こうした精神身体醫學の必要性を認めさせている。

## 三、社会と精神の關係

ところが、更に、身体に大きな影響を及ぼしている精神は、非常に社会とも、相互媒介的な、深いつながりをもつている。

同じ神経症の問題にしても、アメリカの新しいフロイド学派は、社会構造の色々なちがひによつてその症状がちがうことを説明している。

パースナリティとグループの關係、グループダイナミックスの

問題は、こうしたものを解くに當つて重要な役割を果すものと思われる。

#### 四、社会と身体との関係

社会は精神を通じて身体に働きかける場合もあるが、直接身体に働きかける場合の方がより知られている。それは、いわゆる衛生学の領域として既に数々の問題が提出されて来ている。

私たちは、特に砂田を中心として、社会的各階級の母親の初乳のビタミンCの含有量を調べ、それが、富んだ階級の母親の方に多いこと、そうして更に、ビタミンCと乳児の発育の間には正の相関があることを確めた。

こうしたことは、保育医学が、社会的にもけつして消極的であつ

てはならず、新しい社会機構に対しても働きかけて行かなければならないことを示している。

#### 五、心身の発育の問題

保育医学の立体的性が主張されているのであるが、それと同時に、空間的のみならず時間的にもその立体的性が考えられなければならない。つまり、それは、発育の問題なのである。特に精神身体医学などでは、幼児期の精神的外傷と、成人後の神経症との間の関係にふれている。幼児の保育医学の問題は、その時の対象である幼児にのみ限られず、将来の大人でもあると言ふことを忘れてはならないと思ふ。

## 保育歯科学の必要性を提唱する

保育医学研究会

深 田 英 朗  
砂 田 惠 一

小児歯科学と云う学問は歴史的にも極めて新しく一九二二年全米齒科医学会の際米國小児齒科医会なるものが生れたのが恐らく小児齒科研究機関の発端なのであります。その後その必要性にもかゝわらず発展は誠に微々たるもので米國に於ても、今日小児齒科医を標榜して専門に従事している者は決して多くない様であります。併し極く最近の米國齒科医学会に於ては小児齒科問題は私共の想像以上

関心を持たれつゝある様に見受けられます。尨が我が國の現状はどうかと申しますと殆ど無きが如き現状であります。唯小学校齒科と云う点に於て、いさ、か見るべきものがあるに過ぎないのであります。特に小児齒科学上最大の意義を持つ一才——六才の間に於ける保育齒科的な点は実に慘憺たるものであります。この一才——六才に於ける齒科的養護が何故にかくも重大であるかと、云う点に関し